



おうふう どう はやし とも や なお こ
 桜楓堂 林 智哉さん、尚子さん

札幌市北区で自宅の一角を利用してパン屋「桜楓堂」を営む林

さんご夫妻は、2012年11月に栃木県宇都宮市から避難されました。建築士事務所を経営している智哉さんはじめ、尚子さんも避難当時はパン屋を営むことなど予想もつかなかったと振り返ります。

「自然豊かな環境で土に触れながら子育てしたいと思い、宇都宮の家では家庭菜園も盛んにしていました。長男は自由に庭で遊んでいましたね。それが、原発事故の後は、子どもへの影響がわからない不安から、食材選び、庭での砂遊びなど子どもに関する全てのことに気を使い、とてもストレスを感じていました。次男を妊娠していたということもあったと思います。『気にせず伸び伸びとした生活がしたい』と主人と意見が一致し、避難先を探し始めました。

できるだけ遠いところで、自然と街の距離が程よく…と候補地を絞ったら、主人の出身地でもある札幌市に落ち着きました。宇都宮にしながら札幌市内の賃貸住宅を探し、引っ越しました。

この時は主人が会社を移転すれば何とかなる、という感じで、パン屋さんをやるとは思っていませんでした。」

宇都宮の会社は知人に任せ、本社を札幌に移転するという形をとった智哉さんは、札幌に来てみたのはいいけれど仕事が思うようになかったそうです。

「考えてみれば、建築は金額も大きく、その土地での長年の信頼関係があつてこそある仕事で、パンの試食みたいに試し建築もないですよ。すぐに結果が出なくても…と言っている間にも何かで稼がないと生活できません。妻も含め、働きに出ることも考えましたが、保育園料とか考慮するとあまりメリットが見つからず、夫婦で今できることって何だろうと考えた結果、自宅の一角を利用してパン屋をはじめよう、ということになりました。避難の時もそうですが、私たちは決まったら即実行で、2013年5月に子どもの名前から一文字ずつ取った『桜楓堂』という名前のパン屋をオープンしました。」

宇都宮にいた頃はパン屋さんで働いてい



智哉さん手づくりのお店。部屋の窓をうまく利用した作りになっています。雨にも雪にも対応できるように屋根付きです。

夫婦力を合わせて できることをひたむきに――

たという尚子さん。さらにその前は飲食店に勤めていて、その時に調理師の資格を取っておいたそうです。

「専門学校やスクールには行つたことはありませんが、今考えると、食に興味はあつたのかもしれませんが。」

定休日以外は朝4時頃から仕込みが始まります。一通り家事を終えると就寝は23時頃。避難するときに、こんなに働くことになるなんて思ってもみませんでした。宇都宮を引き上げて札幌に来てしまったし、生きていくためには、今、この場でお互いの長所を生かしあいながら、お互いにできることを必死にやるしかありません。夫婦でたまには意見の衝突もありますが、大きなところではいつも同じ方を向いていられるので、大変さはあまり感じていません。

避難目的でもあつた『伸び伸びとした生活』もできています。なるべく道産の素材を活かして、庭先で採れた野菜も使ったりしながらパン作りに励んで

います。小麦粉からイーストまで全てが道産の『北海道パン』もあります。オープンから1



オリジナルの創作パンが多く、パン生地はしっとりモチモチの食感。

周年が過ぎ、最近はお店以外でのイベント出店の機会も増えてきました。」と笑顔でお話ししながら補充用のパンを作ったり、接客したりと忙しい尚子さん。

「店を始めるに当たり、ここは賃貸住宅です。まずは大家さんに相談しました。建物に傷をつけなければ構わないとの了承が得られ、道路側の部屋の窓を利用して店先にしました。」と説明する智哉さん手づくりのお店は木のぬくもり溢れるかわいい仕上がりです。

「建築士の仕事にこだわらず、2階の部屋を作業場にして木工をはじめました。その第一号がこのお店みたいな感じですね。先のことは全然考えていないです。とにかく今を精いっぱいやるしかないよね。」と尚子さんと笑顔で頷きあっていました。

住宅地にある「近所のパン屋さん」ということもあり、買いに来るお客様との会話も弾み、すっかり地域に定着している林さんご一家でした。



智哉さんの描いたイラストや尚子さんの手書きのお知らせなど手づくり感満載。



店先のスペースには知り合い作家さんのアクセサリーなどの展示販売も。